

中国における成人の強化外国語教育について

李 培建*

1. はじめに
2. 外国語教育歴史の回顧
3. 外国語教育のあり方
4. 外国語教育の必要性
5. おわりに

1. はじめに

中国では中華人民共和国が成立して二度の外国語を学ぶ高まりを迎えてきたと言える。第一回目は1949年に中華人民共和国が成立してアメリカを始めとする西ヨーロッパの国々とイデオロキーが食い違っていたため、当時共産圏のリーダーであった旧ソ連と連盟国に結ばれたので、政治、経済、文化、教育など、すべて旧ソ連に学んだということであった。そして、第二回目は七十年代の末から改革開放政策を施されて以来、中国は世界各国、科学文化、経済貿易各分野にわたる交流が一段と頻繁に行われていた。その上国内では政府の指導経済から市場経済に転換された。そして、社会的に個人の意志や希望などを尊重されるようになってきた。人々は自分の考えを持って就職や進学や留学などを選ぶことができ、好きな人生を楽しむことができるようになった。政府のリーダーもアメリカのような科学技術が優れた国々に目を向けるように

なってきた。外国の長所を取り、自分の短所を補うことに政府、国民とも同じ考えを持つようになった。そのおかげで、言葉の大切さを痛感させられていたので、外国語を学び、言葉を通して各分野において外国の優れたすべてのものを学ぶ姿勢をとったわけである。

全国的に二回ほど外国語教育を経験した中国人は絶対に言葉の有難さを忘れてはならない。というのは、外国語教育のおかげで中国人は外国人とのコミュニケーションができ、視野を広められつつあり、もっと公正かつ客観的に世界を見ることができるようである。ますます外国語教育の重要性を認識させられ、外国語教育に力を入れつつある。

外国語教育と言えば、中国においてだいたいの二通りの方法が導入されている。一つは幼児外国語教育であり、もう一つは成人外国語教育である。幼児外国語教育というのは幼稚園時からの外国語教育であり、それに対して成人外国語教育というのは大学からの外国語教育である。ここにおいて中国の成人の強化外国語教育について触れてみたいと思う。

2. 外国語教育歴史の回顧

歴史から中国の外国語教育歴史を振り替えて見れば、秦、漢から唐、宋、元の初期にわ

*中国：大連外国語学院日本語学科副教授 本学社会システム研究所客員研究員

たり、千四百年間ほど世界各国との交流が盛んだった。その当時外国語のわかる人材がとても需要だったのは当然である。従って、二千年の前から中国で外国語教育を行われたと言えるが、残念ながら現在までも昔の外国語教育に関するデータが見つからず、研究中だと言われている。これに対して、『新元史・選挙誌』によると、中国の元の二十六年（西暦の1289年）に「回回国子学」を設置した。これも政府として正式に外国語学校を創立し、外国語教育を始めたとのことである¹⁾。「回回国子学」とは、元の時に、通訳を養成する学校である。貴族や役員などの子弟を募集し、「回回国子学」に入れて、イスラム学を習わせ、卒業後各役所で通訳を務めさせるようにしていたということだった²⁾。これは昔中国の初めての外国語教育の学校であり、イスラム学を教えたと言われている。

2-1. 旧政府の外国語教育

中国の各時代の旧政府は支配を維持するために、国内では支配者の理念を庶民に伝え、武力により、人員管理をした。国外では周辺の国々の支配者や国民に中国の旧政府の権威を敬服させるように高圧政治を施し、意思伝達をした。国と国の関係は強いて言えば政治の関係であり、利用被利用の関係でもあった。中国が政治が安定し、経済が繁栄するので、周辺の国の人々ばかりでなく、世界の多くの国の人々も旧政府に年貢を納め、文化、経済などにおいて交流が行われてきた。しかし、言葉が分かる通訳が少なかったので、交流が難航だったという。例えば元の政府はモンゴル貴族を中心として封建王朝を設立し、当時中アジアの各国との交流が盛んだったが、各方面における人員交流が拡大されるにつれて元の支配者には言葉が壁だということを痛感させられたので、旧政府の政治を貫くよう

に人材を擁護しなければならないと思って元の「回回国子学」を作った。といて、これらの学校で教育を受ける学生は支配者の意志により選抜され、養成されてきた。というのは、支配者の命令に動かされる。要するに服従、支配者の事業に信頼を持ち、安堵感があるという学生を養成してきた。この点に関して中国蘇州大学の顧樹森教授の『中国歴代教育制度』に「“回回国子学” 创立于元世祖到元二十六年（1289年）、学生名額定为五十人。入学资格、限于公卿大夫及富民子弟。学科授于回回文文字为主、专以培养诸官衙译史人才为目的³⁾。（回回国子学は元の世祖に創立し、元の二十六年（1289年）まで続いた。学生数は50人であった。入学資格としては公卿大夫及び資産のある人間の子弟であった。その子弟たちにイスラム文化と文字を教え、役所の通訳人材を養成することを目的とする。）」と書いてあるように、昔の支配者は当時の政府に仕替えさせるために、信頼できる役人などの子供から学生を募集し、養成したというわけである。要するに人材養成は支配者には自己の支配のために継承者を育てることでは、自己の支配の反対者をつくることになるということがよく分かり、政治の目的をもって継承者を養成することが当然であった。それから、その後、明の「四夷館」、清の「ロシア文館」などを設けた。まったく元の支配者と同じ考えにより、これらの学校を経営してきた。ただし、学校管理の方法は多少違ったところがあったが、目的は同じだった。支配者の継承者を養成したわけである。

2-2. 新政府の外国語教育

一九四九年十月に、中国共産党は蒋介石の国民党政権に取って代わり中華人民共和国を創った。当時、旧ソ連政府も中国共産党の政府もマルクス主義を信じ、そして、旧ソ連政

府が中国共産党の政府に対して多くの援助をおこなっていたので、建国前も建国後も、あるイデオロギーに共通意識を持つ中ソ両国は、世界の社会にほぼ同じ声を出していた。生産力も経済力もすべて遅れていた中国は国を興すために何もかも旧ソ連に学ぶ道を選ぶことになったわけである。しかし、各分野における交流が必要だと思われ、言葉がなければならぬので、ロシア語の勉強が流行ってきた。学校でロシア語を学ぶか、政府に派遣されてロシアに留学することは、一つのブームとなっていた。当時ロシア語を身につけることにより、出世するケースがよくあったと言われた。これが原因で、中国の小学校から大学まで第一外国語の教育がロシア語で、そして普及してきた⁴⁾。しかし、どんな人が大学に進学できるか、どんな人が外国に留学できるか、それはまったく各個人の意志や希望によるものではなく、中国政府の各行政機関によって指名され、願いが叶えたものであった。中国政府は教育を受けさせるものを、徳育、知育、体育などにおいて、全面的に、立派に養成するという教育方針を提出し、政治上で信頼できる世代を育てることになる。要するに中国の政治に責任感を持ち、共産党を擁護し、国を愛し、社会主義制度に異議を唱えない継承者を養成することである⁵⁾。一九六六年から「プロレタリア文化大革命」が始まり、国全体として政治運動に巻き込まれていた。そこで、一九七七年まで全国の大学で全国統一入試による学生募集が中止され、大学では外国語教育もストップになっていたという。

どんな人が信頼できるか、どんな人が信頼できないか、それは長いこと、左傾路線に左右されてきた中国では、「革命幹部、革命軍人、労働者、貧農、下層中農」といわゆる「紅五類」の人または「紅五類」の子供が信頼されて、大学進学や外国留学のチャンスを得られ

た。それに対して「旧地主、旧富農、社会主義に反対する者、犯罪者、右派」といわゆる「黒五類」の人または「黒五類」の子供が疑われ、大学進学や外国留学のチャンスを得られなかったわけである⁶⁾。政治がすべてという時代に、「紅五類」という条件が揃わなければ、やはり大学進学や外国留学のチャンスが有り得なかった。それにプロ文革に入って、左傾路線を盛んに唱えられて、「紅五類」に相応しい人達はまったく信頼され、(いわゆる政治審査に合格した者)堂々と大学進学や外国留学をしたりしたわけである。反対に「黒五類」に属する人たちには大学進学や外国留学のチャンスがなく、農村など、生存条件が厳しいところどころに行かされて、「思想改造」を受けさせられた。要するに色の眼鏡をかけて見られた時代では政治条件に限られていた。ところが、その後「読書無用」が氾濫し、政治運動に巻き込まれていた学校教育は事実上ストップになった。が、一九七〇年十月に大連外国語学院と清華大学は中央政府の指示に従い学生を募集し、教学活動を再スタートした。

「是非」の議論により、中国では七十年代の末から改革開放という時代を迎えて、中国は世界に目を向けるようになってきて各国との間で科学文化、経済貿易各分野にわたる交流が一段と頻繁になりつつあった。国内では政府の指導経済から市場経済に転換されつつあった。要するに古いものを捨て、新しいものを学び取る雰囲気にも包まれていた。そして、改革開放政策のおかげで新しい学校教育が始まり、1977年に中国で全国統一入学試験が回復され、社会的に個人の意志や希望などを尊重されるようになってきた。人々は自分の望みにより、就職や進学や留学などを選ぶことができ、好きな人生を楽しむことができることになった。需要があれば、市場が生まれる。中国と日本の交流には言語が必要な

ので、日本語教育も盛んになってきたということから、中国全土において、「日本語ブーム」を迎えてきた。

3. 外国語教育のあり方

八十年代に入り、中国政府は外国に尊敬され、政治や経済の実力のある国家になるには先進国に学ぶべきだと思い、政府要人をはじめ、各分野の関係者が相次いでアメリカやヨーロッパや日本のような科学技術の優れた国々を訪問して先進国の発展ぶりに感心して、主義がよくても、食いものも食べ物もなければよい主義ではないと感させられていたので、経済貿易だけでなく、文化、教育、科学技術、金融などにおいて先進国に学ぶようになった。また、教育により国を救うという明治維新の日本の経験を生かして、科学技術が優れた国に目を向け、外国のものを持って使って、使っているうちに、自分のものに作り直すと考えたわけである。とはいえ、人材がなければ外国の優れたものを学び取ることができなく、人材があっても、言葉がわからなければ、やはり無理だということなので、人材養成を念頭に置かなければならないということになる。どんな人を養成するかは大きな問題のひとつである。幼児から教えれば、相当時間がかかる。すぐ役立つ方法がないかと悩みぬいた結果、まず、必要性を考えて、各分野で活躍している専門のある人材を選出して外国へ留学させ、その国の優れた科学技術を学ばせることが近道だと思ったのである。外国に留学するので、外国語がわからないといけないので、成人の強化外国語教育を考え始めたといわれたわけである。

成人の強化外国語教育とは一応中国で16年間学校教育（小学校6年、中学校3年、高校3年、大学4年）を修了して外国語教育を

受けることである。成人の強化外国語教育は幼児外国語教育と違って、系統的な教育を受けた大人に対して施す外国語教育なので、その教育の理念、方法などにおいて、独特な教育だと思う。というのは、成人の強化外国語教育と言えば、外国語教育を受ける人間は大人であるので、個人的な世界観、人生の目的、行為の基準を持っている人たちである。この成人の強化外国語教育は中国の開放政策の一環として重視され、十一か所の中国の大学に「出国留学人員培訓部」が設けてあり、成人の強化外国語教育が始まったのである。

3-1. 人員募集

「出国留学人員培訓部」の外国語教育は、つまり成人の強化外国語教育の一つであり、1979年に始まった。教育の相手はすでに大学を卒業した人たちであり、大学や研究所に勤め、専門技術を持ってそれぞれのポストに就いている。五十代の人もあるし、三十代の人もあるし、普通の教員や研究員もあれば、リーダもある。実はすでに出世している人たちである。勿論政治条件が第一、専門が第二ということにより、全国的に選抜され、それぞれの「出国留学人員培訓部」に入れたわけである。各大学が中国の教育部の指示に従い、外国語教育をするので、大連外国語学院に属する「出国留学人員培訓部」では主に日本語教育を施す。1979年9月に「出国留学人員培訓部」の成人の強化外国語教育は始まり、現在まで55期続いてきた⁷⁾。每期需要に応じ「出国留学人員」を募集してきた。

| | |
|-----|--|
| 第一期 | 初級クラスは 189 名 |
| 第二期 | 初級クラスは 116 名 中級クラスは 92 名 |
| 第三期 | 初級クラスは 135 名 中級クラスは 76 名 高級クラスは 62 名 |

| | | | |
|------|---|-------|---|
| 第四期 | 初級クラスは 126 名 中級クラスは 87 名 高級クラスは 65 名 | | 高級クラスは 69 名 |
| 第五期 | 初級クラスは 111 名 中級クラスは 75 名 高級クラスは 60 名 | 第十七期 | 初級クラスは 109 名 中級クラスは 108 名 高級クラスは 64 名 |
| 第六期 | 初級クラスは 135 名 中級クラスは 92 名 高級クラスは 86 名 | 第十八期 | 初級クラスは 111 名 中級クラスは 116 名 高級クラスは 68 名 |
| 第七期 | 初級クラスは 126 名 中級クラスは 96 名 高級クラスは 73 名 | 第十九期 | 初級クラスは 134 名 中級クラスは 105 名 高級クラスは 70 名 |
| 第八期 | 初級クラスは 122 名 中級クラスは 80 名 高級クラスは 78 名 | 第二十期 | 初級クラスは 125 名 中級クラスは 116 名 高級クラスは 65 名 |
| 第九期 | 初級クラスは 132 名 中級クラスは 77 名 高級クラスは 65 名 | 第二十一期 | 初級クラスは 132 名 中級クラスは 119 名 高級クラスは 66 名 |
| 第十期 | 初級クラスは 106 名 中級クラスは 114 名 高級クラスは 62 名 | 第二十二期 | 初級クラスは 128 名 中級クラスは 112 名 高級クラスは 63 名 |
| 第十一期 | 初級クラスは 100 名 中級クラスは 142 名 高級クラスは 60 名 | 第二十三期 | 初級クラスは 118 名 中級クラスは 109 名 高級クラスは 76 名 |
| 第十二期 | 初級クラスは 116 名 中級クラスは 111 名 高級クラスは 70 名 | 第二十四期 | 初級クラスは 113 名 中級クラスは 98 名 高級クラスは 59 名 |
| 第十三期 | 初級クラスは 124 名 中級クラスは 119 名 高級クラスは 65 名 | 第二十五期 | 初級クラスは 121 名 中級クラスは 89 名 高級クラスは 60 名 |
| 第十四期 | 初級クラスは 119 名 中級クラスは 106 名 高級クラスは 67 名 | 第二十六期 | 初級クラスは 116 名 中級クラスは 81 名 高級クラスは 58 名 |
| 第十五期 | 初級クラスは 120 名 中級クラスは 123 名 高級クラスは 69 名 | 第二十七期 | 初級クラスは 99 名 中級クラスは 86 名 高級クラスは 54 名 |
| 第十六期 | 初級クラスは 116 名 中級クラスは 125 名 | 第二十八期 | 初級クラスは 101 名 中級クラスは 71 名 高級クラスは 47 名 |
| | | 第二十九期 | 初級クラスは 124 名 |

| | | | |
|-------|--------------|-------|-------------|
| | 中級クラスは 72 名 | 第四十二期 | 初級クラスは 46 名 |
| | 高級クラスは 48 名 | | 中級クラスは 32 名 |
| 第三十期 | 初級クラスは 118 名 | | 高級クラスは 16 名 |
| | 中級クラスは 80 名 | 第四十三期 | 初級クラスは 45 名 |
| | 高級クラスは 44 名 | | 中級クラスは 39 名 |
| 第三十一期 | 初級クラスは 108 名 | | 高級クラスは 19 名 |
| | 中級クラスは 77 名 | 第四十四期 | 初級クラスは 50 名 |
| | 高級クラスは 46 名 | | 中級クラスは 37 名 |
| 第三十二期 | 初級クラスは 89 名 | | 高級クラスは 18 名 |
| | 中級クラスは 68 名 | 第四十五期 | 初級クラスは 31 名 |
| | 高級クラスは 43 名 | | 中級クラスは 21 名 |
| 第三十三期 | 初級クラスは 87 名 | | 高級クラスは 17 名 |
| | 中級クラスは 51 名 | 第四十六期 | 初級クラスは 36 名 |
| | 高級クラスは 36 名 | | 中級クラスは 30 名 |
| 第三十四期 | 初級クラスは 87 名 | | 高級クラスは 15 名 |
| | 中級クラスは 49 名 | 第四十七期 | 初級クラスは 28 名 |
| | 高級クラスは 29 名 | | 中級クラスは 26 名 |
| 第三十五期 | 初級クラスは 83 名 | | 高級クラスは 19 名 |
| | 中級クラスは 50 名 | 第四十八期 | 初級クラスは 30 名 |
| | 高級クラスは 38 名 | | 中級クラスは 22 名 |
| 第三十六期 | 初級クラスは 75 名 | | 高級クラスは 17 名 |
| | 中級クラスは 43 名 | 第四十九期 | 初級クラスは 24 名 |
| | 高級クラスは 31 名 | | 中級クラスは 28 名 |
| 第三十七期 | 初級クラスは 72 名 | | 高級クラスは 15 名 |
| | 中級クラスは 42 名 | 第五十期 | 初級クラスは 19 名 |
| | 高級クラスは 30 名 | | 中級クラスは 21 名 |
| 第三十八期 | 初級クラスは 68 名 | | 高級クラスは 20 名 |
| | 中級クラスは 44 名 | 第五十一期 | 初級クラスは 22 名 |
| | 高級クラスは 29 名 | | 中級クラスは 30 名 |
| 第三十九期 | 初級クラスは 61 名 | | 高級クラスは 12 名 |
| | 中級クラスは 36 名 | 第五十二期 | 初級クラスは 24 名 |
| | 高級クラスは 28 名 | | 中級クラスは 23 名 |
| 第四十期 | 初級クラスは 59 名 | | 高級クラスは 16 名 |
| | 中級クラスは 38 名 | 第五十三期 | 初級クラスは 21 名 |
| | 高級クラスは 21 名 | | 中級クラスは 25 名 |
| 第四十一期 | 初級クラスは 54 名 | 第五十四期 | 初級クラスは 23 名 |
| | 中級クラスは 39 名 | | 中級クラスは 21 名 |
| | 高級クラスは 18 名 | 第五十五期 | 初級クラスは 12 名 |

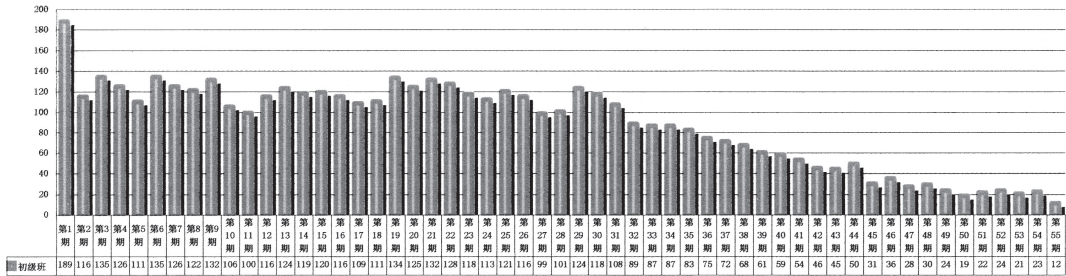


図1 大連外国語学院出国留学人員培訓部初級クラス 単位：人／期

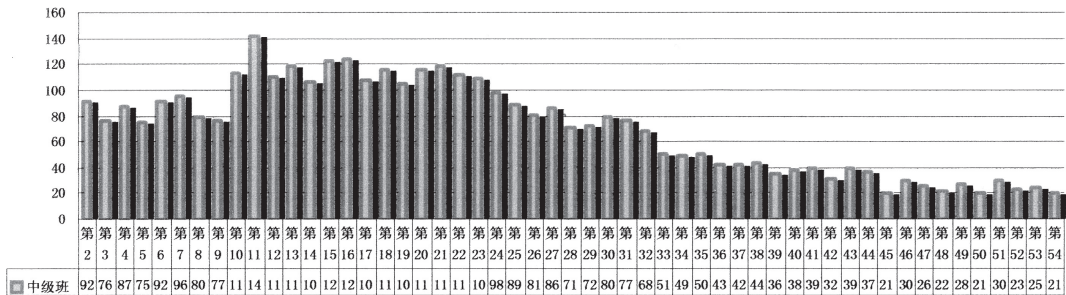


図2 大連外国語学院出国留学人員培訓部中級クラス 単位：人／期

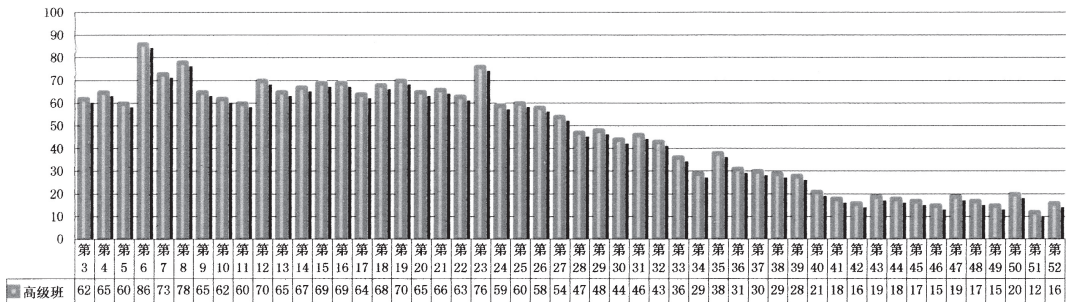


図3 大連外国語学院出国留学人員培訓部高級クラス 単位：人／期

というように募集人員がだんだん減ってきた。これは八十年代ごろは中国国家教育部の留学司（留学局）は出国留学の管理をし、各大学や研究所などに留学人員の人数定額を割り当ててきたので、結構安定した留学人員の人数を有した。ところが九十年代の半ばごろから中国の各大学は日本のすべての大学と人員交流ができるようになったので、中国国家教育部の留学司のような交流の窓口がなくても、日本に行けるようになってきているわけである。この中で中国国家教育部の留学司による

留学人員の人数定額のほかに、中国各大学や研究機関や各省、市の役所から派遣されて、「出国留学人員培訓部」に入って「強化日本語教育」を受けた学生は八十年代の初め頃から九十年代の半ばごろまでほぼ200名か300名であったという。

3-2. 教育方法

成人の強化日本語教育を受ける相手はそれぞれ条件が違っている。というのは、「出国留学人員培訓部」に入る時は、どこかで日本

語の講義を聞いた人もいれば、まったく「あいうえお」から習い始める人もいる。中国が広いので、標準語が上手に言う人もいれば、下手な人もいる。ということのため、成人の強化日本語教育を妨げるところが多かった。いかに成人の強化日本語教育をスムーズに進めていくかは大きい問題になっている。

学校や教師によって成人の強化日本語教育が違うので、「強化日本語教育方針」としては教員全員は同じ教育方針に従い、強化日本語教育を進められるように「強化日本語教育方針」を編集し、教科書の選択編集をした。また、教員を日本国に派遣し、教育法、文学、文化、文法、語彙などを専攻させて、教師陣を充実してきた。というように、着々と成人の強化日本語教育を進めてきたのである。

学生に対していかに強化日本語教育を施すか、教師にとっては大きな課題のひとつであると言える。学生たちが「出国留学人員培訓部」に入って、半年か一年ほど、日本語教育を受けて日本国に赴いて、専門の勉強をすることになる。研修生や客員教授として中国で習った日本語を生かして留学生活を送り、専攻に取り組むということである。従って学生たちの事情を考慮してすぐ使える日本語を教えることが先決だと思う。

強化日本語教育においては教育方法はいろいろな説があったが、長いこと、「交際能力」を唱えてきた。「交際能力」とは八十年代に速やかに発展を遂げてきた言語教育の中で教員たちに認められた教育の方法のひとつである。この「交際能力」はアメリカの社会言語学者 Hymes が提出した「交際能力」の概念に大いに関連している。Hymes は 1972 年に「交際能力について」(On Communicative Competence) という論文の中に初めて「交際能力」の概念を提出したわけである。その後「交際能力」をめぐるいろいろな議論されて

きた。実は「交際能力」を提出されることにより、外国語教育に大きな影響を与えたわけである。

「交際能力」について、学者により説明はまちまちである。しかし、強化日本語教育は文法しかないもとの概念よりひとつ大きな進展を見せてきた。強化日本語教育に新風を吹き込んだと言えよう。強化日本語教育に「交際能力」を導入して強化日本語教育を経験したものである。授業の時、「交際能力」の概念を生かして、次の試みをしてきた。

(1) 対話

対話の場合は、自由対話とタイトル対話に分かれる。いわゆる自由対話は「交際能力」を練習する際、もっとも自由性のある練習のひとつである。というのは、学生たちはこの自由性のある練習により、暫くテキストから放られる。そして自由のままに個人の言語交際能力をやって見せる。自由対話の時に、教師は教科書離れに学生たちに質問をする。例えば、「週末をどう過ごしましたか。」「来週にどんなスケジュールがありますか。」「日本語の勉強上では何か難しいことがありますか。」などというようにやっている。

タイトル対話はある問題に関して学生たちにおのおの見方を発表してもらうことにする。学生たちのグループをふたつに分けて、話題を決め、告げる。習った文型、語彙を使わせて話題をめぐって見方を発表してもらうことにするとともに、個人の経験などを生かして、互いに話を交わすことができるように指導してやっている。

対話は会話交流の重要な形式のひとつである。対話中に学生たちにいろいろなポイントを吟味させ、マスターさせるようにする。例えば、合作原作、相談の技、企画能力、主題転換などの技術である。

(2) 討論

討論は教科書の内容をめぐって行われる。話題を提出して前もって、学生たちに考えてもらうことにする。これも「交際能力」の練習の方法のひとつである。伝統的なやり方はただ教科書の内容の中から質問を出してから、学生たちにその文の中の言葉を捜し出させ、答えを埋めることにしたが、これは伝統的なやり方と違って、ひとつ討論をする場合、教科書の内容を中心として、質問の内容を展開して、学生たちに答えてもらう。例えば、「あなたは作者の見方に賛成しますか。」「文章の中の主人公をどう見ますか。」「この文章を読んで、この作者に何か言いたいですか。」というように指導してやっている。「強化日本語教育」を受ける学生たちは「出国留学人員培訓部」に入る前に、すでに就職したので、社会経験を持っている。将来日本国に行って研修生活を送るので、習った言葉を身につけられるように言葉を使って、経験したことや専門の内容や仕事などに合わせて話させるようにしている。とあって、たとえば人口と社会に関する文章を学習する時、「中国のコンパスをどう見ていますか。」婦人にかんする文章を学習する時、「文の中の婦人についての描写が正しいと思いますか。」というように質問の内容を展開して討論を進めている。

(3) 芝居作り

いろいろな芝居作りにより、学生たちに「交際能力」の練習をさせる。兎に角、芝居を一つ作って、学生たちにその芝居の中でいろいろな役を担当させ、人間と人間がコミュニケーションできるような形式で「交際能力」の練習をさせることにしている。例えば、先生の指導のもとで学生たちは授業の場面を作り、教師と学生になって、教師と学生ような交流をしたり、遠足の場面を作り、友達と

友達のような交流をしたりするように、買い物とか、食事とか、ジャーナリストのインタビューとか、いろいろな芝居作りにより、学生たちの言語能力、社会文化能力、交際能力などを高めるようにしてる。

また、学生たちが日本語の学習の中で一番こまっているのは敬語の使いまわしだと言われてるので、芝居だけでなく、日常生活のなかでも、無理というほど、敬語の使い方を言わせる。何時でも何処でも敬語の使い方を言わせてやることにより、何時話すか、どう話すか、徐々に正しく言えるようになってくる。それから、芝居作りを通して、日本人の習慣に合わない行為や言い方などについて学生たちにも注意をしている。例えば、無理に人に煙草を勧めるとか、知人に会って食事をしたかとか、何所に行くかとかのように我々中国人の日常文化の習慣を何気なく交際語として相手に対して使うことによく注意してやっているの、学生たちは気をつけるようになっている。

(4) スピーチ

スピーチとはある問題について口頭で個人の考え方を述べる「交際能力」の練習の方法のひとつである。このような「交際能力」の練習の方法は学生たちの思考力や演説力を高めるのによいと思う。普段のスケジュールや出国の研修計画や自分の国や専門などについて授業のとき、一人か二人の学生に口頭で発表してもらって、ほかの学生たちはそれを聞いて意見を言ったり、質問をしたりして、学生と学生との相互交流できる。この相互交流を通して、学生自身は自らそのミスがどこにあるか、気づけるし、先生の指導を受けて学生全員は同じミスを繰り返すことができないと思う。その場合において教師は何も言わなくて、最後に、学生と同じように個人の見方をいうし、不備なところを指摘することであ

る。その後、学生に発表したスピーチを文章に纏めてもらって、もう一度指導する。このようなスピーチを練習させて、学生たちはもっと正しく言うことができる。また、書く実力をアップできる。

以上のように「交際能力」の練習をして、毎期の学生たちは政府に派遣されて、日本の各大学で各々専攻を頑張ってきた。

3-3. 強化日本語教育上の難点

中国が広くて、学生たちは全国各地から集まってきた。というので、日本語学習において厚い壁にぶつかるケースがよく見られる。

(1) 発音の難点

「出国留学人員培訓部」に集まってくる学生たちは出身地が各々なので、その学生なりに方言をいう。方言のため、中国語の標準語が正しく言えなくて、日本語の語彙の発音を真似ることが大変難しいものであった。昔も今も同じことである。例えば、「なにぬねの」「らりるれる」は同じに聞こえるし、区別して発音できない。とても困ったものである。仕方なくその学生に中国語の標準語をいわせるように、中国語の新聞を声を出して標準語で読ませたり、ラジオを聴かせたりしている。また、五十音図を行で読ませないで、ずっと段で読ませてやって、徐々に区別できて、読めるようになっている。

(2) 思考習慣の違い

中国人の思考習慣を日本語表現に持ち込んで、物事を見る学生が多いようである。自分自身としては正しいつもりで言うが、日本人がそうは言わない言葉表現は多い。例えば、食事のとき、誰かが自分のためにコップの中にお酒を注いでくれたりすると、「すみません」と言わなくて、「ありがとう」という。中国人は自分のためにいいことをしてくれたから、お礼を言うのは当然だと思う。これに

対して、この場合、日本人は人に迷惑をかけたと思って、詫げる。

また、挨拶言葉として、「そのうち遊びに来てください」というのが普通だが、中国人は本当だと思って待つ人がいるような例が見られる。

(3) 漢字の有難さと迷惑さ

中国人にとって、日本語には漢字があって読み取れるから、助かるとおもうが、実はそうはいかないところが多い。例えば、「手紙」という語彙は日本語では人間と人間のコミュニケーションの手段のひとつであるが、中国語ではトイレペーパーの意味である。また、「汽車」という語彙は日本語では蒸気機関車の意味であるが、中国語ではトラックの意味である。というように、ある日本語の漢字は中国語に解釈すれば、日本語の意味がなくなる。

というような例はほどほどあるので、注意することである。

4. 外国語教育の必要性

21世紀に入り、中国の対外開放政策の進展、特に2001年のWTO加盟、2008年の北京オリンピック開幕や2010年上海万博の開催など、中国が様々な分野に目覚ましい発展を遂げる中で、各国間の協力関係が一層強化拡大され、また、今後互い同士パートナーとしての交流はさらに大きく進展することになる。国や地域の交流のおかげで、中国は国や地域と各分野における交流規模がどんどん拡大されつつある。そのなかで中国と日本との交流は盛んになりつつあり、切手も切れない関係に結ばれ、協力すれば共に勝つことにある。現在各分野における大きな発展を遂げている中国においてもGDPは26年ほど二桁で伸びて、中国の発展はますます注目されている。中国のパワーや発展振りなどが世の中

で有識者に認められるようになってきている。もし経済の発展がなければ、国が立ち遅れることに政府も民間人も一致した意見を持ち、国をあげて精神を一つにして経済の発展に重点を置くようにしている。その一方で、この経済などに関する交流を拡大させるには、国と国とのコミュニケーションがなければならないことにも異議を唱えるものがないことである。それに、この相互交流を如何に維持発展させるかということに関して、言葉という掛け橋が大きな役割を果たしていることをつくづく感じさせられている。従って、ますます外国語教育を重視する傾向が強くなっている。こうした時代背景に対する正しい認識を持ち、異文化への理解力及び双方の言葉である中国語と日本語の高度な運用能力、そして通訳能力を兼ね備えた国際コミュニケーターとしての語学スペシャリストが今後ますます求められることになる。

需要があれば、市場が生まれる。中国と日本の交流には言語が必要なので、日本語教育の必要性も身近に感じられる。特に、八十年代中期以後、中日両国の貿易量が大幅に増長し、中国大陸に進出する日本企業の数が増し、中国の各地に日本企業の現地駐在事務所、中日合併企業、日本独自の資本企業がまさに雨後の竹の子のように現れた。このような時代の流れに左右されて、日本語が分かる人材の不足が更に深刻になりつつあり、八十年代以後の日本語人材の需要は、就職先から見れば中国の経済、貿易、金融、産業の諸分野が加わると、中日合併企業、日本独資企業の求人がいっそう緊迫した状態であり、日本に対してより幅広い知識とより深い理解を持ち、国際関係、国際貿易、国際金融、企業経営などの基礎知識を持ち、独自の事務処理ができる人材が求められるようになってきた⁸⁾。というわけで、数多くの人が日本語に

興味を持っている。グローバル化進展の中、各分野における隣国の日本との交流中に日本語がなければならないという重要性をますます認識されている。

成人の強化日本語教育を受けて、毎期の学生たちは政府に派遣されて、日本のような科学技術の優れた国を訪問して先進国の発展ぶりを身を以て感じ、中国の立ち遅れているところを痛感させられた。ほとんどの学生は個人の専門を持って、研修先の指導教官の指導のもとで研究を続けられ、視野を広めることができ、日本の各大学で各々専攻を頑張ってきた。日本の大学や研究所で長所のある専門の知識を身につけられて帰国して、その知識を生かして中国の経済、教育、貿易、金融、産業の諸分野において大いに活躍することにより、中国の国作りに貢献されている。今中国の湖南大学で教授を務めているAさんは帰国して15年目になるが、日本の京都大学で金属材料学を専攻して、とてもプラスになり、よかったと言っている。多くの新しい発明ができ、専門分野にその実力を認められている。実は成人の強化日本語教育を受けて、日本の大学で研修を受けた成功者の一人であると言える。このような例はたくさんある。30年あまり大連外国語学院の「出国留学人員培訓部」で強化日本語教育を受けた学生は2万人近くあった。現在減っているが、国家教育部はやはり「出国留学人員培訓部」の成人の強化日本語教育を重視している。こうした状況の中では、大学での成人の強化日本語教育は大いに強調された。

5. おわりに

外国語教育の不備な現状が一番大きな問題といえば、教学経験のある教員不足である。新しい教員を募集しているが、経験不足

のため、満身に教育ができない。特に新しい学科の場合、その学科の研究と教育従事できる教員が足りない。如何に外国語教育を展開させるかは常に教育者の間の中で議論されている。その中で政治環境、教育理念、教育設備、教育方法、教師養成等を挙げられているが、日本語教育の教師の一人としてはどれも重要だと思う。しかし、合理的教育体系を維持するには合格の教師を擁護しなければならない。これらの教師の教学活動を通して学校を経営する第一歩だと言える。外国語教育の不備な現状から見れば、長い間日本語教育を施す大学がないというほど、日本語学科を設けて、日本語教育を行っている。それに学生の数は年ごとに増えている。それに間に合うように、学校を卒業したばかりで、教師を務めるケースがよく見られる。経験不足で、その教師の教育水準と実力を認められないことがある。また七十年代から八十年代までの日本語教育の教師陣の特徴としては中日両国間の各分野にわたる直接交流が日増しに頻繁に行われてきたので、言語による交際技能、とりわけ口頭表現力（会話能力）が重視されるようになった。この時期から「聞く、話す、読む、書く、訳す」という言語交際の技能を全面的に身につけることが外国語人材の必要条件として強調され、そして「聞く、話す」の教授法が広範に採用されていったので、日本人教師を毎年募集するようになってきている。というわけで、学生の聞く、話す能力が伸びつつ、社会の需要に対する適応性が高められた。但し、これらの時期の日本語教育は、やはり不十分なところがあり、ただ語学教育に限っているので、教育課程による知識面が狭くなり、日本に対する深い理解、交流または研究のための人材養成を目指す教育システムがまだまだできていなかった。従って豊かな知識と成熟経験を持つ日本語教師の養成が急

務となったのである。

そのほかもう一つは、日本語教師の研究活動も不足している。数多くの教師は学内の日本語専攻と非専攻の講義、そして社会人対象のアルバイト講義に迫われて、研究活動を行う時間が少ない。確かに外国との研究交流が増えつつあるが、チャンスが少ないのも事実である。

それから、折角それぞれの大学で成人の日本語教育を受けて、日本に行つて研修した学生は何か原因で、帰国後、まったく専攻と関係のない仕事をするケースがみられるので、残念だと思っている。

変わるべきものと変わらざるべきものがあるが、競争が厳しい社会でより高い目標を目指して、正しい日本語教育法は日本語教育者と日本語学習者にとって望ましいものである。

【注】

- 1) http://depart.kdntc.cn/ktced/paper_view.asp?id=193
中国外语教育发展史回顾（2008）、p2
- 2) 「辞海」上海辞書出版社（1980）、p765
- 3) 顾树森「中国历代教育制度」（2001）、p165
- 4) 李培建「中国における日本語教育と日本語教材の編成及び使用について」中央学院大学社会システム研究所『紀要』第八卷第一号（2007）、p210
- 5) 李培建「中国における日本語教育と日本語教材の編成及び使用について」中央学院大学社会システム研究所『紀要』第八卷第二号（2008）、p199
- 6) 「文化大革命四十周年」STNN, CC（2006）
- 7) 「大连外国语学院日本語学院介绍」高等教育出版社（2008）、p5
- 8) 李培建「中国における日本語教育と日本語教材の編成及び使用について」中央学院大学社会システム研究所『紀要』第八卷第一号（2007）、p209

参考文献

- 1)「外语强化教学论文选」
上海外语教育出版社 2000年5月
- 2)「短期外语强化教育论集」
北京语言学院出版社 1998年6月
- 3)「高等院校日本語専攻高年級教学大綱」
教育部高等学校外国語専攻教学指導委員会
日本語組編 2003年3月
- 4)「大学日本語教学大綱」
高等教育出版社編 2000年10月
- 5)「中国外语教育史」
上海外语教育出版社 1998年5月
- 6)「高校日本語専攻八級試験大綱」
上海外国語教育出版社編 2002年2月
- 7)「全国外国語水準（wsk）大綱」
高等教育出版社編 2003年3月
- 8)「大連外国語学院教学大綱」
内部資料 1996年
- 9)「大連外国語学院海外考试中心简介」
2007年12月
- 10)「文化大革命四十周年」
STNN, CC 2006年5月

The Adult Education of Strengthening Foreign Language in China

LI Peijian

Dalian University of Foreign Language

Abstract

This article introduces the adult education of strengthening foreign language in China. It emphasizes the current situation, influence and problems of the education. The education plays an important role in economic development.